パルクールの歴史と先行研究および宮城県富谷市における実践例

History and Previous Researches of Parkour, and a case of practitionners in Tomiya, Miyagi, Japan

平石　貴士*

キーワード：パルクール、ジョルジュ・エベル、恐怖の感情、都市の知覚変容、宮城県富谷市

はじめに

はい。聞こえていますでしょうか。ご紹介に与りました立命館大学受入客員研究員の平石と申します。今日は「パルクール研究の現在（当日の報告タイトル）」というタイトルで、パルクールの歴史的な経緯と、学術的な世界でパルクールがどのように研究されてきているのかということ、最後に、石沢さんの JUMP & LEAP というジムを調査し、調査した側の視点から――また石沢さんからの報告があると思いますが――報告させていただきます。では、始めさせていただきます。

＊立命館大学衣笠研究機構　受入客員研究員　※講演当時の所属

1. パルクールの歴史と起源

1-1. パルクールの歴史

最初に、パルクールの歴史について簡単にお話します。まずパルクールは1980年代にフランスのパリ近郊の都市のリスで、(画面スライド)右に写真が写っていますが、このダヴィッド・ベル(David Belle)を中心にして、まだパルクールとは呼ばれていない頃ですが、あの身体の動きを探求して一緒にトレーニングをしていた仲間達がおりまして、その仲間たちから生まれたとされています[1)]。

このトレーニングの仲間の集団は、後にヤマカシ(YAMAKASI)と呼ばれることになるグループを作っていました。最初、彼らは自分たちのやっていることを「パルクール(parkour)」とは呼んではいませんでした。フランス語で「デプラースマン(déplacement)」は「移動」という意味なのですが、「移動の芸術(l'art du déplacement)」というパルクールの別名も当初はまだありませんでした。グループの活動がメディアから注目を受けてくるのが、1990年代後半なのですが、この頃にフランスのテレビ局が注目して、短い映像作品〔Speed Air Manと呼ばれる作品。Youtubeで見ることができます〕を作っています。ちょっとだけ再生してみます…〔動画再生開始〕…こういう感じで2分ぐらいしかない動画ですけれども、先程写真をお見せしました、ベルが主演したこの短い作品が1998年(この時点ではYAMAKASIをすでに脱退していました[2)])に作られます。ちょうどその頃にパルクール(parkour)という名前が考案されます。

それからパルクールが世界的に知られていくきっかけとなっていくのは映画、なかでも、アクション映画を通じてです。まず、2001年の『ヤマカシ(YAMAKASI)』という映画があります。この映画は、パルクールの創設に関わったYAMAKASIのメンバー7名(ベルとフーカンはすでに脱退)が実際に出演しているアクション映画です。このようにまずYAMAKASIが主演した映

画がありまして、次に、パルクールが世界的に知られていくきっかけになった映画として、2003年にイギリスの公共のテレビ局（Channel4）が制作した「ジャンプ・ロンドン（Jump London）」というドキュメンタリー映画作品があります。これもYAMAKASIの中心人物であったセバスチャン・フーカン（この時点ではすでにYAMAKASIを脱退）が主演しています。この作品はロンドンの都市中をパルクールの動きで跳び回る姿を主題にした映像作品です。この時に、フランス語であったパルクール[3)]を英語圏に伝わりやすくしようとして、「フリーランニング（Free Running）」という英訳語が考案されました。そのため英語圏ではパルクールという呼び方に加えて、フリーランニングという呼び名で呼ばれることがあります（日本でもフリーランニングという言い方はよく知られています）。

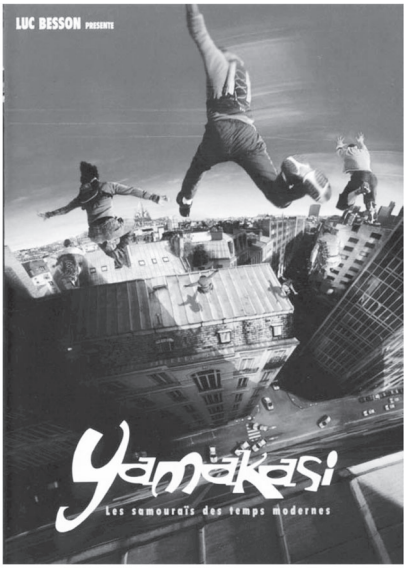

図1　映画《YAMAKASI》
（Ariel Zeitoun監督、2001年）

さて、YAMAKASIという映画について、そのストーリーを手短に紹介します。重い心臓病にかかったある子どものために莫大な手術費用が必要になり、そのお金を得るためにパルクールを使って、お金持ちの家に泥棒に入り、盗みを働き、また警察から逃げる際もパルクールで逃げていき、そしてその子どもを助けるというものです。映画の冒頭のシーンだけ少し再生します。（映画の最初のシーンを再生）今映っている7名がYAMAKASIのメンバーです。アジア系のメンバー（チョウ・ベル・ディンとウィリアムズ・ベルはベトナム系フランス人です）が確認できますね。YAMAKASIが多様な民族性、

肌の色から構成されているということは特徴的です（メンバーのほぼ全員がフランス植民地にルーツを持っています)。それから、もうひとつ、パルクールを有名にした初期の映画作品を紹介しておきます。ダヴィッド・ベルが主演してる作品で、『アルティメット（原題 :Banlieue 13)』という映画です。これはマフィアにさらわれた妹をパルクールを使って助けるというストーリーの映画です。映画のなかでパルクールを使っているアクションシーンを少しだけ紹介します（ベルがマフィアから逃げるシーンを再生)。

このように 1980 ～ 90 年代にはフランスの数人のグループのなかで人知れず発展していたパルクールですが、2000 年代初頭になると、世界的にヒットしたアクション映画のなかでパルクールが使われていくことで、英語圏を中心にして急速に世界に知られていくという経緯があります。

1-2. パルクールの起源としてジョルジュ・エベルとメトード・ナチュレール

最初に、パルクールの発生と映画を通じた世界的伝搬という経緯についてお話をさせていただきました。次にですね、パルクールの起源として、フランスの軍人で体育教育思想家であるジョルジュ・エベル（Georges Hébert）が考案した「メソッド（方法)」があるということについてお話します。このスライドの左に写ってる人物が、ダヴィッド･ベルのお父さんのレイモン･ベル（Raymond Belle）です。彼がフランスの軍隊に所属していた時、エベルの考案した「メトード・ナチュレール（Méthode Naturelle)」という方法を学び、それが息子のダヴィッドを通じてパルクールを作り出したと言われています。

さて、この「メトード･ナチュレール」なのですが、これは英語で言えば、「ナチュラル・メソッド」ということで、「自然な方法」という意味になります。海軍大尉になったジョルジュ・エベルが 1910 年代から 20 年代にかけて考案した体育および軍人養成の方法です。「メトード・ナチュレール」は、1920 年代からフランスの公教育で体育の教科書に取り入れられていまして、

フランスでは一時期はかなり根付いていた体育の方法のようです。多数の著作をエベルは書いておりまして、時代によって彼も見解も変わってくるのですけれども、後期の発想をまとめると、以下のようになります[4)]。

まずですね、彼は近代スポーツでは強い身体が形成できないと主張しました。近代スポーツの特徴としてですね、短距離走とか走り幅跳びとか、そういうものですけれど、何かの種目に専門化していく傾向がある、と彼は言います。そういう専門化していく方向では、強い身体、もしくは、強い軍人を作ることはできない。だから、走ること、跳ぶことだけに特化するのではなくて、登る、バランスを取る、持ち上げる、投げる、泳ぐなど、全般的な身体能力を拡張する必要があると、彼は言います。また、近代スポーツが想定するような、均質的に工業化された空間ではなくて、多様な自然環境のなかで鍛錬して、能力を開発することが重要である、と。それによって多様な環境に適応できる精神も育っていくと、彼は主張していきました。自然な環境のなかで訓練するというところから、ナチュラルなメソッド、自然な方法という呼び方が生まれていきます。今でもですね、このエベル主義（Héberisme）というものを自分達は継承していて、パルクールというよりも、エベル主義を実行しようとしている、つまり自然環境のなかでパルクールのような運動をしている人達もいます。

この「メソッド」が果たしてパルクールの起源なのかということなのですが、もう少し詳しくお話いたします。ダヴィッド・ベルのお父さんのレイモン・ベルが、当時フランスの植民地だったベトナムで 1939 年に生まれます。7 歳の時に、フランスとベトナムの間で、後のベトナム戦争につながる第 1 次インドシナ戦争が起こります。その時に、レイモンのお父さんは亡くなってしまい、レイモン・ベルは軍隊の孤児院に預けられ[5)]、そこで育てられ、フランス軍の「メトード・ナチュレール」を学びます。軍隊で教育を受けた後、（1954 年のディエンビエンフーの戦いの後、フランスはベトナムからの撤退を決め、軍隊が本国へ引き上げるときに、レイモンも連れて行かれ）フ

ランス本国にわたって、戦争の後は、(パリ市の消防局は軍隊直属であるため、そこに軍隊のルートで就職して)パリで消防士として働きます。息子のダヴィッド・ベルは13、14歳の頃に父レイモンからメトード・ナチュレールを教わったと、インタビューのなかで語っています。

このようにパルクールの起源をめぐる語りがなされているのですが、学術的にはですね、そこまできちんと調べられていることでもないので、これからの課題でもあるのですが、エベル主義がパルクールのルーツのひとつだろう、と考えられています。しかし、エベルからパルクールの全てが出てきたかのように考えるのは、間違いになるだろうと思います。パルクールが形成されていく過程として、エベル以降の多様な要因を考えていかなければならないと思います。たとえば、YAMAKASIがどのように形成されたのか、またそれ以降パルクールが世界に広がっていく過程などを見ていかないといけないと思います。

フランスには、非常に層の厚いエベル本人の研究や、本人以降のエベル主義の研究があるのですが、日本には紹介されていなくてですね、研究の状況が全く伝わっていません。フランスでなされている研究では、エベル本人の考えと、エベルを引き継いで世界中で実践されてきたエベル主義は違うということが言われています。歴史的経過を捉えるならば、各国に拡散したエベル主義についても、検討しなければならないでしょう。たしかに、エベル研究としてはそうなのですが、パルクールに対してそれが意味を持つのかを考えていくと、エベルを掘り起こしていくことで、パルクールの可能性が広がるようでしたら大事だと思います。しかし、逆に言えば、パルクールがエベルの全てを引き継ぐ必要はないので、十分可能性がある部分は引き継いで、不要な部分は捨てていくということでいいんじゃないかと思います。以上が、パルクールの歴史と起源についての報告となります。

2. パルクールの学術的研究

次に、学術世界において、どのようにパルクールが研究されてきたのかということについて、お話をさせていただきます。まず、パルクールが世界中に広がっていると同時に、社会のなかに多様に広がっているために、学術的な研究の視点も、非常に広範囲に及ばざるをえません。パルクールはフランスから発祥して、メディアを通じて世界に伝播し、現在では、イギリスがパルクールの実践者をもっとも多く持つ国になっています。世界中で各国ごとの違いもありますし、また、各国内でのパルクールの違いもあると思います。そういった違いが色々ありますので、学術的な研究というのも、パルクールを「こうだ！」というように、一義的に定義して決めつけるというのではなく、様々な角度からパルクールを見ていくことが必要だろうと思います。

今日はですね、以下の三つの領域からパルクールの学術的な研究を見て行きます。一つ目が、パルクールとテクノロジーという観点、二つ目がパルクールと都市、都市の見方の変容、三つ目がパルクールとスポーツ政策という観点です。

2-1. パルクールとテクノロジー

まず、パルクールとテクノロジーに関わる研究があります。パルクールについてよく言われることなのですが、パルクールには非常にハイテクな部分があります。映像メディア、インターネット、スマートフォン、動画サイト、SNS、Twitter、Instagram など、最先端の技術によって、パルクールがグローバルに拡散し、それを受けてローカルに様々な様態が生まれてきたということが指摘されています。

こういうことに関連した研究で興味深いものとして、ソープとアーマ（Thrope & Ahma）が、中東のパルクールの動向を調査して、特にパレスチナのガザ地区のパルクールチーム、イスラム教徒のトレイサーを研究したもの

があります[6]。2000年代にはイスラエル（ユダヤ教徒のイスラエル）が、パレスチナのイスラム教徒を爆撃するということがあり、常に戦争状態と緊張状態のなかで、若者が生活をしていたことがこの研究の背景にあります。その時に、後にParkour GAZAというチームを立ち上げるアブドゥーラ・アンシャーシ（Abdullah Anshasi）さんが、大学をちょうど卒業した22歳であった2005年に、アルジャジーラという国際放送テレビ局を通じて、先ほど紹介した「ジャンプ・ロンドン」を見て、パルクールに大ハマりします。それからインターネットを通じて、パルクール仲間を集めたり、情報収集をしたりします。イスラム教の宗教的な理由で、女性がパルクールを行えないということがあったり、あるいは家の上に登ったりすることが不審がられるというように（このようなことは、どこの国や文化でもあることだと思いますけれど)、そういうことがあったりするなかで、特に、いつ空爆があるか分からないという恐怖の状態がある。彼らは爆撃を受けた廃墟で、そこなら誰も来ないので、文句を言われずにパルクールができるということで、そこでやっていました[7]。日々の戦争のためにですね、経済がめちゃくちゃになっていまして、若者の失業率が6割に達する状態にありました。そのようななかで、恐怖の状態を自己制御する方法を、パルクールを通じて獲得する、または、ストレスを緩和する方法としてパルクールを行うということで、こういった活動が現地の心理学者から高く評価され、パルクールの意義がガザ地区で受け入れられていった、ということを示した研究があります。

面白いことにですね、おそらく、Parkour GAZAを立ち上げたアブドゥーラさんは、石沢さんと同世代に近いのではないかなと思います。後に紹介します石沢さんは、2008年頃からパルクールを日本で実践されてきたわけですけれども、パルクールがメディアを通じて世界中に広がっていくなかで、色々な地域で、色々な立場に置かれていた人たちが、それぞれの目的で、パルクールを追求していたということ、世界同時的にそういう人たちが世界中にいたということは大変興味深いです。なお、この研究の調査方法としては、

（紛争地域に入っていき調査することは困難であるため）Facebook を通じてガザの地域のトレイサーと連絡を取って研究したということです。

2-2. パルクールと都市、都市に対する見方の変容

次にですね、パルクールと都市という研究群があります。都市でパルクールが行われていくと、人目に着くので、「パルクールって何だ？」ということになっていきます。そうすると、パルクールを都市空間で実践するというのは、どういうことなのか、という研究が現れてきます。こういう研究に関わったのは、都市研究の地理学者や都市建築の研究者です。そういうテーマですと、パルクール以前には、スケートボードが都市で実践されることが増えていった時に、議論がなされました（イアン・ボーデン『スケートボーディング、空間、都市―身体と建築』）。

そういう研究を引き継いで、パルクールでも同じような視点でこのテーマが議論されています。こういう都市研究でよく引用されるのが、フランスの学者アンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre）です。ルフェーブルは、資本主義に最適化した都市のあり方を批判対象としています。都市の様々な空間が経済的な機能性によって配置されていて、ビジネスやビジネスマンにとって機能的なものとして都市が構成されていきますが、それらにとって無駄なもの、邪魔なものは、排除されていきます。たとえば、「食べる場所や話す場所はここでこう決まった形で行動すべきです」という形で、機能ごとに都市空間の配置が位置づけられていき、効率が良いように配置されていく。しかし、こういうような都市の配置が、本当に人間にとって暮らしやすいものなのだろうかという批判が起こります。ビジネスの追求で都市は人間にとって暮らしづらいものになっているのではないかということです。こういった観点からパルクールへの関心が向けられます。パルクールはこれまでにあった都市の空間使用の規則や移動順序の規則を侵犯していく。この侵犯は犯罪だ、という見方よりも想像力やイマジネーションを与えるものだと評価され

ていきます。

その想像力が与える衝撃というのは、改めて、都市はこういうものだったのか、建築とはこういうものだったのか、という気づきを与え、現状の都市のあり方への疑問を気づかせるきっかけとなるということがあります。こういう観点から研究しているアトキンソン（Atkinson）というスポーツ研究者は、カナダのトロントのトレイサー集団を研究しています[8)]。アトキンソンが調べたトロントのトレイサーは、都市のなかで孤立感、孤独感、また、都市になじめないという感覚を持っている若者が多かった。そういった若者が、パルクールを通じて都市を自分のものとして取り戻すということを彼は言っています。いくつか名言だと思われる、トレイサーのインタビューを取り上げておきたいのですが、まず一人目は、「僕の周り〔この大都会〕には話すことも気にかけることもない何百万の人々がいる」「しかし、知らない人ばっかりの中でどうやってその場所に強いつながりの感覚を持つことができるのか」と都市に対する疎外感を述べています。それに対して「パルクールは、空気、光、地面、そして自分を囲む人々と一体であることに集中する方法だ」と、「都市の物理的構造や人間と一体となるための方法」として位置づけ、パルクールを通じて都市を自分のものとして取り戻すことができる、と語っています。

次に二人目の発言を取り上げましょう。「フリーランニングを行うことが公園以外の場所では法に反しているならば、公園は僕の住んでる場所から16キロも離れていて、そこに行くためにバスに乗って行かなきゃいけない」という発言は、運動する場所が得られない、運動する場所が限られているという、都市のスポーツ政策の問題を捉えています。それに関わってそのトレイサーは、「走ったり跳んだりといった基本的なことが、何かルールに反したことなのか？」と「自分が住んでる場所で走ることも出来ないのか？」と疑問を提起しています。トレイサーの実践から都市生活でこれをやってはいい、これはやっていけないとされている常識に対する疑問が提起されている

ことがわかります。

このような経験を経て、パルクールは自分の住んでいる都市に対する考え方を変えていくということを、これらのパルクール研究は強調します。ちなみに、こういった研究群では、スペクタクルな見世物としてのパルクールというのは、それを見ている視聴者にとって、娯楽としての刺激を与えるだけであり、そういう視聴者がパルクールを動画で見ても、都市への批判などは起こってこないスペクタクルな見世物としての派手な動きの探求に対して、否定的な評価をしています。

こういう研究群において、パルクールを説明するあるひとつの型があるのですが、それは「縞模様の空間とスムーズな空間」という議論です[9)]。これはフランスの哲学者のドゥルーズとガタリ（Deleuze & Guattari）が言っていることなのですが、「現代都市とは縞模様の空間だ」と。それはですね、柵で区切られたラインに沿ってしか移動できないという意味です。たとえば、歩道は歩道に、車道は車道になっており、それぞれの歩道と車道は、柵で区切られています。そうなっているので、皆、その縞模様に沿って移動していくということです。これによって、その移動速度を制御したり、そこを通ったら移動時間がこれぐらいだということが合理的に計算可能になったりするのですが（たとえば、カーナビの到着予定時間の計算）、そういう形で移動を制御することで資本主義に最適化した都市が構成されるという考え方があります。

これに対して、「スムーズな空間」は、柵が出来る以前にあった空間であって、柵などに囚われずに移動できる空間ということです。こういった議論のなかでパルクールは、障害物がある空間にも関わらず、スムーズに移動していく運動だと言われ、このような観点からパルクールが説明されます。

都市の研究者がパルクールに着目する時に、パルクールが都市の見方を変えると言うことがあります。つまり、パルクールによって、柵や塀の見方が変わると。たとえば、それら（柵や塀）がただの障害物じゃなくて、遊ぶ場

所に見えてくる。こういう現象は、ビジョン・オブ・パルクール（Vision of Parkour）と呼ばれています。

ビジョン・オブ・パルクールというフレーズは、「ジャンプ・ロンドン」という、先ほど紹介したドキュメンタリーのなかで、セバスチャン・フーカンも言っています。「街のすべてのものが僕たちのためのものになる。フリーランニングのためのものになる。子供のように見て、考える必要がある。これがビジョン・オブ・パルクールだ」と。

そういうように、都市の物理的な構造と、それを見る人間側の認知との関係を追求する研究が地理学にあり、そういう観点からパルクールが着目されています。たとえば、サヴィール（Saville）という地理学者は、「恐怖（Fear）」という感情に着目して研究しています[10)]。まず、人間は空間を感情によって捉えていると。つまり、人間は空間を頭で考えるよりも、まず、感情で捉えているということです。感情地理学という感情に着目して、人間の空間知覚を研究する分野があります。

サヴィールはパルクールの恐怖という感情に着目するのですが、たとえばですね、地面の上で１メートルの距離をジャンプをすることはものすごく簡単です。ところが、ビルの上から別のビルへのジャンプのように高い場所から高い場所へのジャンプになると、途端にたった１メートルの距離のジャンプでも難しくなるということは、パルクールの実践者からも、パルクール研究でも、よく言われていることです。

そうですね、たとえば、細い横棒の上に立つということもすぐには大変難しいことですが、さらに細い横棒の上から他の棒の上へと跳んだりと、パルクールではしますけれども、こういった動作を獲得する過程で、トレイサーは様々な恐怖を通過していく。サヴィールは、この過程に着目し、研究しています。こういった過程を研究していくためには、人間の内面に深く入っていく必要があるのですが、こういった分野では、フランスの哲学者のメルロ＝ポンティの現象学的アプローチが使われています。どうやってその恐怖の

感情が構成されているのかを、自分の内側から分析していく。そこでサヴィールは、トレイサーのグループに入って、パルクールを実践して、その恐怖を克服していく過程を日記に付けていきます。その日記をもとに、自分の内面を分析していくのですが、この議論で面白いのは、感情と視覚と記憶と思考が、それぞれバラバラに危険を認識しているという議論です。

たとえば、まだ跳んだことがないような高い場所で、跳べるかどうかわからないというときに、恐怖で身体が震えているとします。このときに震えているのは感情であり、つまり、内臓的な反応であると。しかし、感情は震えているのですけれども、視覚という意味では、非常に冷静にですね、「ああ、1 メートルしかない」と視覚上は跳べるということを、非常に明確に見ている。こういう形で感情と視覚が矛盾して対立します。あるいは、記憶という側面では、過去に失敗した記憶が蘇る、つまり、トラウマがあり、視覚上は跳べるはずでも、トラウマ的な恐怖があったりする。

こういう統合されていないバラバラな要素が人間の内面にあるのですけれども、思考は感情、視覚、記憶という要素についてそれぞれ考えたり、分析したりする。たとえば、この恐怖の感情というのは、いったい、何を恐れている感情なのかを分析していく。そうすると、感情も恐怖も、思考にとっての考察材料になっていく。このように感情を分析することで、正確に空間を把握することができるとサヴィーユは言っています。このようにして、練習を繰り返して恐怖を克服していく過程で、感情、視覚、思考、記憶という、それぞれバラバラだった要素が、統一されたものになっていく。上手く跳べる時というのは、バラバラだったものが統一されたときである。そういう過程を通じて、空間に対する認識が変化し、感情のあり方も変化する。以上のことを述べた研究があります[11)]。

2-3. パルクールとスポーツ政策

ここまでは、パルクールをやっている人の内面に迫った研究を取り上げま

したが、次は、パルクールがスポーツ政策とどのように関係しているのかということについての、ギルクリストとウィートン（Gilchrist & Wheaton）の研究を取り上げます[12)]。

ヨーロッパでは、公式のスポーツと言うと地域にあるスポーツクラブに所属して行うというイメージがあります。つまり、人々のスポーツ実践というのは、何かのクラブに所属することで行われるというイメージですね。そうなると、非公式のスポーツというのはそういう正式なクラブには所属しないで行われているようなスポーツのことを指し、パルクールなどは、そういう見方をされます。そこで、これまでの公式スポーツに関心が持てず、クラブに所属していない層にスポーツをやってもらうための政策として、パルクールを活用できるのではないかという期待から研究がされています。

ロンドンのウェストミンスター地区の事例なのですけれども、行政が進めている政策がありまして、それは8歳から18歳の子どもに、放課後や休日にパルクールをやってもらうという政策です。それを通じて、スポーツクラブが捕捉できていない層を捉え、それによって、青少年の犯罪抑止や健康の促進を目指すというものです。そして（パルク―ルが公的な政策に入っていく時に懸念材料となりやすい）パルクールが危険だという見方に対しては、Parkour GENERATIONSという、石沢さんも視察したイギリスの団体なのですが、そういった団体が、安全に教える講師を派遣して、子どもたちにパルクールをやってもらうということが、政策としてイギリスで行われています。

以上は、行政がパルクールを活用していく事例ですが、それに加えて、ウィートンらが指摘しているのは、イギリスの公教育のなかに、パルクールが体育として取り入れられるようになってきているという傾向があります。この背景にはこれまでの体育が生み出す運動とは異なった新しい運動の様式を、教育によって生み出していきたいという、イギリスの体育政策の転換があると彼女らは分析しています。これはパルクールの動きが現代の体育に

必要だという評価でありまして、パルクールをただ都市で行われているサブカルチャーとみなすのではなく、体育という視点から評価がしていくという流れがヨーロッパにはあるということで、こういう観点もまた、重要ではないかと思います。

また、パルクール・パークの形成という動きに対して、「それは囲い込みである」とする批判的な視点を持って都市政策として議論することも行われています。イギリスでは2009年からパルクール専門の屋外型のパークの生成が進んでいるのですけれども、こういうパークが形成されていくと、「パーク内だけで、パルクールをやりなさい」「街中ではパルクールをやらないでください」というように、街中でのパルクールを禁止していく、そういう囲い込みの方向性を持った政策ではないかというトレイサーたちの懸念があります。やはり、街中の多様な環境で実行することにパルクールのスポーツとしての真の意義がありますし、また、都市の見方を変えるというような、これまでに紹介してきた議論も囲い込みの方向性からは抜け落ちてしまいます。そこで、こういう点に留意したパルクールをめぐるスポーツ政策としての議論があります。

3. 日本のパルクール・ジムの調査：JUMP & LEAP（宮城県富谷市）について

次にですね、今日お話をしていただく石沢さんが経営されているJUMP & LEAPというジムについて、述べていきます。

日本におけるパルクール専門のジムやパークの展開については、スライドに示したように、東京（Mission Parkour Tokyo）、宮城県富谷市（JUMP & LEAP）、広島（Mission Parkour Hiroshima）、沖縄（CONNECT GYM OKINAWA）、福岡（PARKOURGYM FUKUOKA）、名古屋（Max Attack）に現在ある状態です[13]。JUMP & LEAPは、仙台市近郊にある富谷市に2019年3月にオープン

しました。郊外のショッピングモール内の、不人気になったゲームセンターコーナーを改修して作っています。利用者の主体は、小学生の子どもで、男女比は7対3ぐらいで、想像していた以上に女の子が多いという印象でした。女の子に非常にパルクール人気があるということは、特に印象的でした。放課後にお母さんが子どもを連れてくるというケースが多い。交通の便があまり良くないということと、また練習中に怪我のリスクがあるので、ご両親に見ていて欲しいということがあります。

3-1. ジムの立地条件：富谷市の地理的分析

なぜ、富谷市にパルクールジムができたのかということですが、様々な見方ができるのですけれども、富谷市の地理的な状況の分析を少ししてみます。「平成の大合併」と呼ばれる市町村の合併がありました。仙台市との合併が検討されたその時はまだ「富谷村」でした。結局合併はしないことになったのですが、実は、1970年代からずっと人口増加が続いてきている地域でありまして、（人口が一定量を超えたということで）2016年に富岡村から富谷市となりました。この市の平均年齢は39.4歳（2010年国勢調査）で、若い子育て世代が多く住んでいると言われています。ですので、放課後の児童クラブなどのニーズがあると言われていまして、子どもたちが放課後にパルクールをするというニーズがあるだろうと思います。また面白い共通性として、パルクールが発祥したパリ近郊のリス市も、1970年代から急速にパリの郊外の、パリへの通勤圏の都市として、急速に開発が進んだ都市でありまして、この市の平均年齢も26歳（2016年）と非常に若いです。ただし、パリ郊外の場合は、日本とは違って、移民が多く住んでるという要因があります。また、リス市は（HLMと呼ばれる）公営団地住宅が多く[14]、パルクールは、そういう公営団地の集合住宅のなかで生まれてきたというイメージがあります。富谷市は公営団地というよりも、一戸建ての新興住宅地が多いかなというイメージです（これは行ってみた時の印象に過ぎませんが）。

余談ですけれども、意外かもしれませんが、山形県、福島県といった地域というのは、半導体工場が多くてですね、実は大阪には半導体工場が一ヶ所ぐらいしかなく（2005年[15]）、それに比べると実は遥かに多くて（2005年に宮城県3ヶ所、山形県8ヶ所、福島県10ヶ所）、アメリカで、シリコンバレーからAmazonなりFacebookなり、そういうIT企業が出てきたこと考えると、実はそういうIT技術者の居住者が多くて、新産業に強いという立地条件があり、それがパルクールと相性がいいのではないかと思っています。

3-2. 設立者の石沢憲哉氏の経歴について

JUMP & LEAPを作った石沢さん[16]の経歴について、（私がパルクール研究にとって重要だと思われる点に着目して）述べていきます。今33歳（2021年）の男性で、青森県出身です。高校卒業後、宮城県仙台市の専門学校に通い、作業療法士の資格を取っています。（作業療法士としての）専門がですね、子どもの運動能力のリハビリであったり、障害がある子の運動能力を高めることが専門でありまして、この点が、パルクールともリンクするところがあると思います。

21歳から作業療法士として、岩手県盛岡市の病院に勤務して、この頃（2008年）にパルクールを知って、盛岡市で結成されていたパルクールチーム（「侍族 サムライトライブ」）に参加します。その時は、作業療法士として働きながら、寝ても覚めても、ずっとパルクールをするような日々を送ります。23歳の時に、練習中に大怪我をして、それをきっかけに仙台市の病院に転勤します。リハビリ後に作業療法士として働きながら仙台市でパルクール教室を始めています。この子ども向けのパルクール教室が、お母さん方に非常に好評で、お母さん方のほうで、（子どもがパルクールをやっている親たちの）パルクール・コミュニティが形成されて、そのコミュニティが公園や公民館を借りて、石沢さんを講師として呼ぶという活動が生まれていきます。活動を拡大するために、スポーツの任意団体を設立し、保育施設や児童クラブで教

室を開催するようになります[17]。それから、2016年に作業療法士の仕事を辞め、トレイサーたちと共同してパルクールの合同会社SENDAI X TRAINを設立します。この時に、日本初の屋外型パルクールパークを作っています(現在は閉鎖)。

そして2019年にパルクール専門ジムJUMP&LEAPを開設しています。また、選手としても日本体操協会が主催した第1回日本パルクール選手権に出場しています。選手としての側面は、今日は全然紹介していないのですけれども、他にも海外での多数の大会出場経験があります。

4. ワークショップのための論点の提示

時間が押していますが、論点をいくつか提示したいと思いますね。まず、子どもとパルクールというテーマですが、いくつかのパルクール専門ジムを見ていくと、子どもが利用者の主体であるということが多いです。子どもにパルクールが人気であるという印象があります。ジョルジュ・エベルも、体育・教育論者でありまして、子どもの肉体的成長と精神的成長が、ナチュラル・メソッドによってもたらされると主張しています。

また、先ほども述べましたように、イギリスでは、パルクールが体育政策のなかに入ってきています。国家が率先して子どもの身体運動を作っていくという、体育政策の転換の動向があります。それに対して日本の場合、パルクールがどうなっていくのかということを見ていく必要があると思います。

次に、パルクールと社会ということなのですけれども、パルクールがどのようにして社会につながっているかということに関しての論点です。三点挙げてみますが、一つ目は、パルクールによる人格形成ですね。あるいは、ビジョン・オブ・パルクールと言われるような都市観、都市を見る視点の生成、そういうことによって、社会の変化へとつながっていく。二つ目はですね、都市でのパルクール実践に対する法的、社会的、政策的な視点から、パル

クールがどうのように扱われてきたのか、またこれからどのようにそれを扱っていくのか、そういう都市のなかの実践という問題があります。三つ目は、パルクールの制度化やスポーツ化という流れに関する問題です。体育政策の変化によって、公教育へと進んでいく動きもあるかもしれませんし、あるいは、競技化が、特にオリンピック競技化を進める動きがあります。国際体操連盟が競技ルールを定めて、パルクールの競技化を進めています。これについてはですね、パルクールは非競技性の文化でやるものだという批判もありまして、そういう議論は現在も続行中です。これらの進行中の議論も含めて、パルクールは都市で行うものなのか、あるいは、競技として行うものなのかという議論があります。以上の論点を提起して報告を終わりにします。

最後に参考文献は以上になります（スライドに映す）。それでは私の報告を終わせていただきます。ありがとうございました。

注

1）YAMAKASI のメンバーがパリの郊外でどのようにして出会い、どのような考えで尋常ではないトレーニングを行うようになっていったかという経緯については、彼らに対して詳しくインタビューして書かれた著書 Julie Angel, 2011, *Ciné Parkour: a cinematic and theoretical contribution to the understanding of the practice of parkour*, Createspace. がおそらく最も詳しい。

2）パルクールを研究したスポーツ社会学者ジェフリー・キダーの著書（J. Kidder, 2017, *Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*, Rutgers University Press）によれば、YAMAKASI のメンバーは 1997 年に消防署のイベントでその驚異の身体運動を見せて有名になったことで急速にマスメディアと接近するようになり、早くもその年の時点でメンバーに亀裂が生じ、主要メンバーだったダヴィッド・ベルとセバスチャン・フーカンは YAMAKASI を脱退した。キダーは、ベルが Parkour、フーカンが Free Running、残りの YAMAKASI のメンバーが l'art du déplacement という名称を、マスメディアに売り込んでいくために考案したという歴史を提示している。詳しくは上述のキダーの著書の chapter 1 を参照のこと（なお本書は当シンポジウムを開催しているメンバーで翻訳を行い、近刊の予定である）。

3）Parkour という言い方の元はパルクール・ドゥ・コンバッタン（parcours du combattant

＝兵士の練習コース）と呼ばれる、フランス軍が兵士を鍛えるために作っていた障害物通過訓練コースに由来する。

4）Gleyse, J., C. L. Soares et A. Dalben, 2014, ”L'œuvre de Georges Hébert au Brésil et en France dans les écrits sur l'Education physique. Deux facettes de la nature（1909-1957）”, *Sport History Review*, 45（2）: 171-199.
Defrance, J., 1997, “La méthode Hébert entre l'Amérique et les sauvages”, *Revue EP&S*, n° 266 : 9-12.

5）レイモン・ベルが軍隊の孤児育成施設に預けられた経緯についてもう少し正確に時系列を話すと、レイモン・ベルの父親は従軍医師のフランス人で裕福な家庭を持ち、母親はベトナム人であった。レイモンが母方の叔父の家に遊びに行っている間にインドシナ戦争が勃発し、ベトナムは南北に別れ、レイモンは家に帰れなくなってしまった。叔父は、レイモンを育てるつもりがなく、戦争終結の見通しはまったくなく、軍隊の施設に 7 歳のレイモンを預けてしまった。そして父はその戦争で亡くなり、施設にいるレイモンはそのことを聞き、自分は生涯、孤児であることを確信した。軍隊で生きていくために、より自発的にハードなトレーニングを繰り返した。以上の経緯は、ダヴィッド・ベルへのインタビュー本（David Belle, 2009, *Parkour*, Intervista. 英訳版もある）が詳しく、それによるものである。上述の J. Angel による著書も、レイモン・ベルに関してはこのインタビューを典拠にして書いている。

6）Thorpe H. and N. Ahmad, 2013, “Youth, action sports and political agency in the Middle East: Lessons from a grassroots parkour group in Gaza”, *International Review for the Sociology of Sport*,50（6）: 678-704.

7）廃墟で行われているパルクールの様子は、彼らがチームで撮影した映像から伺うことができる。英国紙 TheGardian がその映像を公開している。
https://www.theguardian.com/cities/video/2015/mar/10/banksy-parkour-gaza-shadia-mansour-video（2021 年 8 月 30 日最終閲覧）

8）Atkinson, M., 2009, “Parkour, Anarcho-Environmentalism, and Poiesis”, *Journal of Sport and Social Issues*, 33（2）: 169-194.

9）Mould, O., 2009, “Parkour, the city, the event”, *Environment and planning: society and space*, 27 : 738–750.
Ortuzar, J., 2009, “Parkour or l'art du déplacement”, *The drama review*, 53（3）: 54–66.

10）Saville, S.J., 2008. “Playing with fear: parkour and the mobility of emotion”. *Social and cultural geography*, 9（8）: 891–914.

11）翻訳し刊行予定のキダーの著書における恐怖の感情の分析は、サヴィールの研究よりも真に迫っているという印象を受ける。キダーは著書の chapter 4 で、米シカゴの熟練トレイサーの言葉を引用して、パルクールにとってむしろ恐怖は重要であり、恐怖をなくしていつでもできると思った時にむしろ怪我をするから、恐怖という感情を活

用すべきだというトレイサーの話を伝えている。

12）Gilchrist, P. & B. Wheaton , 2011, “Lifestyle sport, public policy and youth engagement: examining the emergence of parkour”, *International Journal of Sport Policy and Politicsc*, 3（1）: 109-131

13）大阪にある Power Arts はパルクール部門を持つ施設であるが、元々はアクロバットを教えるところとして始まった複合施設であるので、ここでは挙げなかった。

14）2017 年のデータで、フランス全体の住宅に占める HLM の割合は 5.6%（全国平均）であるのに対して、リス市は市内の全住宅のうち 23.2% が HLM である。
https://www.journaldunet.com/management/ville/lisses/ville-91340/immobilier（2021 年 8 月 30 日最終閲覧）

15）近藤光 , 2010,「日本半導体企業の工場立地に関する考察　――国内工場立地の変遷から――」『Informatics』3（2）:31-46.
https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/handle/10291/13453（2021 年 8 月 30 日最終閲覧）

16）正確に言うと、JUMP & LEAP は店名であり、法人名としては SENDAI X TRAIN である。石沢氏は SENDAI X TRAIN の CEO である。

17）いわゆる「総合型地域スポーツクラブ」の制度を使って作られた「一般社団法人　とみやスポーツクラブ」に参加して、パルクール教室を開催していた時期もある。